

氏名	村上 晶
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 7603 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代巫者研究—知識の日常的交渉の観点から—

主査	筑波大学 教授	文学博士	山中 弘
副査	筑波大学 教授	博士（宗教学）	津城寛文
副査	筑波大学 准教授	Ph.D	木村武史
副査	駒澤大学 教授	博士（文学）	池上良正

論文の要旨

本論は、カミサマ、イタコ、さらにはスピリチュアルセラピストなど、現代を生きる多様な巫者たちとその周辺の人々を対象として、巫者の超越的次元についての語りや実践が生み出され、現実として受け入れられていく過程を明らかにするものである。序章では、知識社会学と知識人類学の成果を参照しながら、巫者と巫俗の動態を捉えるための新たな視点として、依頼者や周囲の人々との日常的な知識の交渉過程に注目する本論の立場について明示した。津軽のカミサマを対象とした第 1 部と第 2 部では、まず第 1 章で 5 名のカミサマを事例として、その語りと実践にみられる知識の構成の即興的性格を指摘した。第 2 章では、カミサマの輪郭を描くために、境界的事例に着目し、商売の有無とローカルな知識の共有・利用が、カミサマを定義する主要な条件であることを示した。第 3 章では、修行の後景化について論じ、行が盛んに行われていた時代に比べて、現代のカミサマにおいては、知識を即興的に構成する能力が一層重視されていることを指摘した。

第 2 部第 4 章では、依頼者の語りを事例とし、依頼者の側にはカミサマに接する際の期待と受容の固有なパターンがあることを論じた。第 5 章では、S 地区でのオシラ堂建立の過程から、依頼者の期待とカミサマの託宣の関係について議論を深めた。第 6 章では、集落の共同祭祀である春祈禱の現状を、K というカミサマを事例に論じ、K の非定式的な口寄せが、共同祭祀としての性格が薄くなった現在の春祈禱のニーズに合致していることを明らかにした。第 3 部第 7 章では、全国的な知識の交渉に晒されることによって生じているイタコの変化について論じた。第 8 章では、スピリチュアルセラピストを事例として、地域の巫者伝統の消失によって不足した知識の代替として、スピリチュアルを冠する書籍等が機能していることを指摘した。第 9 章では、スピリチュアルセラピストたちの成巫過程の語りを分析し、そこで共有されている「型」を明らかにした。また、津軽のカミサマとの比較から、両者の差異を個々の象徴の奥行きと社会関係の広がりとの差に求めた。

結章では、日常的な知識の交渉過程を核として関係論的に巫者を論じる本論の視座が、宗教概念批判以降の宗教研究全体に関わるより大きな問いのなかに位置づけられることを示した。

審査の要旨

1 批評

本論文は、青森県津軽地方を主なフィールドとして、宗教社会学的、宗教人類学的視点から、現代に生きる多様な巫者たち（カミサマ）とそのクライアントたち、さらには巫者たちに系譜に連なるとされる今日のスピリチュアルセラピストと自称する新しいタイプの霊能者たちを対象として、巫者が語る神霊に関する語りや実践がどのように生み出され、それが人々にどのように受け入れられていくのかを中心に論じた力作である。

本書全体の構成は、理論的な視点と問題意識を扱った序章を冒頭においた三部からなっている。第1部「カミサマの姿」と第2部「カミサマと人々」はいずれも津軽地方でのフィールドワークに基づいて、カミサマとそれを取り巻く人々、そしてその宗教実践を支える地域共同体が扱われている。一方、第3部の「現代社会と巫者」では、研究の視野を地域共同体から現代社会に広げることで、こうした伝統的な巫俗にどのような変化が起こっているのかを、「イタコ」という存在の変容や、スピリチュアルセラピストと自称する人々の意識や経歴に注目しながら、第1部、第2部で検討してきた伝統的巫者との比較を踏まえて現代社会における巫俗の変化と持続を論じている。以上のような内容をもっている論述の中で、著者はいくつかの興味深い点を指摘している。なかでも、第1部3章で論じているカミサマたちの修行の後景化という指摘は特筆に値するように思われる。ここでは、カミサマたちの修行道場の一つであった金剛寺の状況が取り上げられているが、近年において霊場赤倉の衰退と、カミサマの行離れが「霊力」から「靈感」への強調へという変化を招いているとしている。神秘的な力を獲得するために不可欠とされた厳しい修行が次第に行われなくなるにつれて、誰でもが感じることができる「灵感」が前景化していることは、まさに、都会で行われる新しいタイプの巫俗の実践、つまりスピリチュアルカウンセラー的な実践との連続性を考える重要な論点を提示しているように思われる。

さて、全体として、本論文の学問的意義を要約的に挙げるとすると以下の2点になるように思われる。第1に、従来の巫者研究が神仏との交流という巫者の超越次元に焦点を合わせてきたのに対して、超越的な次元よりも、巫者の託宣の受容を巫者とクライアントとが共有する日常性に埋め込まれた宗教的知識の交渉という点から理解しようと努めようとしたことが挙げられるであろう。とりわけ、クライアントが託宣を受容する構造として、巫者とクライアント双方が分有している地域の社寺の宗教的権威をめぐる知識が、託宣の内実を規定する発想の源になっており、その知識を即興的に駆使しながら託宣が語られ、受容されていることを明らかにし、それを「神的発想群」の即興的構成という著者自身の言葉で指摘したことは注目されなければならないだろう。第2番目に、本論文は、青森の伝統的な巫者（かみさま）と現代のスピリチュアルセラピストと称するニューエイジ的な人々の実践を連続的に捉えることで、従来の民間巫者研究に現代宗教論的な視座を付け加えたことを指摘できるように思われる。というのも、伝統的巫者は当該地域の民俗的宗教性に強く規定されていることを前提として、その成巫過程を中心とした研究蓄積があり、他方、ニューエイジ的な宗教性は都会に居住する教育程度の高い中間層に認められる新しい宗教意識と見なす傾向が強く、両者を一つの問題系から論じることはなかった。しかし、本論は、イタコの実質的な消滅を背景としながら自称イタコを名乗る人物の活動とツーリズムとの密接な関わりという事例を導入部としながら、成巫過程や巫儀の「型」の消滅した社会においても、その伝統を代替する仕方で、スピリチュアルなものを扱う書籍やテレビを媒介とした新たなタイプの巫俗が成長していることを豊富な事例から明らかにしている。著者にとって、「巫俗とは、巫者とその周囲との間で繰り広げられる知識の交渉過程を意味」しており、「その交渉過程が超越次元についての想像を生み出す」とされる。とすれば、動員されるイディオムは異なるとはいえ、津軽も都心のアパートも、超越次元についての想像は絶えず生み出されているのであり、そこに伝統的巫者と新しいタイプの巫者との間の連続性を認めることができるとしているのである。

以上の2点において本論文の成果は高く評価できるが、若干の問題も残されている。序章で論述された理論的視座が本論で論述されている具体的事例に十分に生かされていないために、事例から理論へのフィードバックが弱いという。例えば、知識社会学や人類学的知見に依拠した「知識の運用論」という視点は、巫者とクライアントとの相互交渉を考える場合には有効といえるが、それをさらに理論的に展開するために援用されている O.Riis & L.Woodhead の「主体」「共同体」「象徴」という三項モデルは、結論部分を含めて、どのように事例の分析に適用されたのかが十分には明らかでないように思われる。また、巫者とクライアントとの間での日常的交渉を考える際に、それらを支える神仏の存在への信念という超越的な次元をどのように評価するのか、つまり、巫者の託宣の内実を単なる日常的交渉の過程で作り出されたものに過ぎないのかどうかに関する著者自身の基本的なスタンスがはっきりとしないようにも思われた。しかし、これらの問題は著者の本論文での優れた学問的貢献を何ら減ずるものではなく、現代巫者に関する研究領域における著者の学問的貢献は特筆すべきものがある。

2 最終試験

平成 28 年 1 月 26 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。